「やきもの」の分類

1　はじめに

「やきもの」は私たちの毎日の生活の中で使用される身近な道具のひとつです。特に、食事の際には陶器や磁器の色とりどりの碗や皿を用い、お気に入りの「やきもの」で食事をすると、そのおいしさや楽しさもまた大きく感じることもあるでしょう。博物館においても「やきもの」は多く展示しており、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、三彩、青磁、白磁などがあります。このように様々な「やきもの」を作り、用いるのは日本文化そのものとも言えます。ここでは、その歴史や分類についてご紹介いたします。

2　土器

土器は粘土を成形して７００～８００度前後の低温で焼かれた無釉のやきものことを言います。素地は不純物などがまじっている場合が多く、ざっくりとした感があり、水を吸い、水をそのまま入れておくと漏れることが多いです。作り方は時代によるが、原始的なものでは粘土の塊から形をつくる「手づくね」や紐状の粘土を巻き上げて、手で成形していく「紐作り」で作られる。焼成は通常、野焼きの場合が多く、簡易な窯などを用いることもある。

土器は今までの石など身近な材料をもとに加工した道具（石器や木器など）とは根本的に異なる技術革新でした。それは土が火を受けると固くなるという「化学変化」を人類が初めて利用したもので、人びとの生活を大きく変えていくことになります。煮沸できる器をえたことで、今まで食べることのできなかった食べ物の毒性やアクをとることができ、食中毒などで命を落とすことの危険性が排除され、動・植物の利用範囲も格段に大きくなりました。福岡では、春日市門田遺跡の爪形文土器が最古級とされ、今から14,000年ほど前から使用され始めたと言います。

3　陶器①焼き締め陶器（炻器）

長石などを含む陶土を１１５０～１３００°前後で焼き上げたやきものです。代表的なものは、日本では須恵器になります。その始まりは朝鮮半島からの技術導入で、その主な技術は窯とロクロでした。釉薬は自然にかかったものはありますが、基本的に意識的に施しているものはありません。吸水性はある程度ありますが、土器のように水漏れが起こることも少なくなりました。英語のストーンウェア（Stoneware）の訳語で、それは大正時代に作られたものでした。

日本語		土器	陶器	炻器	磁器
中国語		陶器	瓷器		
英語		earthenware	pottery	stoneware	porcelain
特徴	釉薬	ない	ある	ある・ない	ある
	焼成温度	低火度焼成 700-800℃前後	低・中火度焼成 1100-1200℃前後	高火度焼成 1150-1300℃前後	高火度焼成 1300℃以上
	強度	軟質	軟質・硬質	硬質	硬質
	吸水性	高	中	低	ない
事例		縄文土器 土師器	唐津焼	須恵器 備前焼 常滑焼 （いわゆる焼締陶器）	有田焼 出石焼 マイセン

「やきもの」分類表

（出光美術館『やきもの入門　色彩・文様・造形を楽しむ』２０１９より）

福岡では５世紀半ばに須恵器の技術者集団が朝鮮半島から来ています。朝倉郡筑前町に所在する小隈・八並・山隈窯跡、また、豊前地域においても京都郡みやこ町徳永居屋敷窯跡などがその初期の須恵器窯とされます。その後、大野城市所在の牛頸窯跡群が急速に発展し、大阪府堺市陶邑窯跡群、岐阜県名古屋市東部から瀬戸市にかけての猿投窯跡群に並ぶ須恵器焼成の三大古窯跡と呼ばれるほどになります。

４　陶器②施釉陶器

長石などを含む陶土を１１００～１２００度前後で焼き上げた「やきもの」です。釉薬は須恵器を焼く際に、燃焼した木々が灰となり、それが器物にかかり、陶土の中にある長石と結合して自然釉として現れたものがその発見の始まりでした。また、８世紀には中国から日本へ唐三彩が、その後、青磁や白磁などももたらされ、その色鮮やかな様に多くの人は新鮮な驚きを感じたことでしょう。

福岡では国内外の多くの「やきもの」の流入が博多を通じて行われましたが、中世期を通じて福岡や九州では陶器の生産が行われなかったのは何故でしょうか？三大古窯跡のひとつ猿投窯は中世に入り、瀬戸や渥美などへ発展していきました。中世に九州陶器が生まれなかったのは、謎のひとつといえましょう。日本では中国などの陶磁器に触発されるように、灰釉・緑釉陶器、奈良三彩などが作られ、釉薬による装飾が発展していきます。中世には瀬戸窯が灰釉や褐釉などを発展させていきますが、緑や黄色など色とりどりの「やきもの」は中世の終わり、安土桃山時代になって美濃窯などを中心に焼き始め、江戸時代初めに福岡では高取焼や上野焼の生産が始まります。

５　磁器

土器や陶器（炻器含む）の原料は粘土や長石などを含む陶土、つまり「土」でした。しかし、磁器の原料はカオリン、長石、珪石などの磁石、つまり「石」になります。焼成の温度は、１３００度以上になります。釉薬が施され、吸水性はなく硬質で光を通す場合もあります。

日本では陶器の歴史が長く、磁器が焼かれるのは江戸時代初期までまたなくてはなりません。佐賀の有田で朝鮮人陶工の李三平が磁石を発見し、磁器を焼成するのは伝承では1616年と言われます。発掘調査でも1610年代には磁器が焼かれ始めることが確認されています。福岡では18～19世紀に久留米藩で朝妻焼、福岡藩で須恵焼において、染付など磁器を生産しています。

６　「やきもの」の分類は難しいッ！

本稿では「やきもの」の分類を、「土器」、「陶器①焼き締め陶器（炻器）」、「陶器②施釉陶器」、「磁器」の4種類に分類しています。しかし、それぞれ厳密な区分けをしていきますと、この分類では、どこにも属さないものが出てきてしまいます。論者によっては、須恵器を土器として分類し、最初期の渡来人が作った　須恵器（初期須恵器）を陶質土器と呼びます。また、古くは須恵器を祝部土器などとも呼びました。さらに、須恵器など焼き締め陶器には、焼成の具合により、土師質のものも含まれます。こうなると、炻器が水漏れしないという定義も怪しくなってきます。

さて、陶器と磁器がほぼ同じころに生まれた中国では、両者を「瓷器」として分類しています。このように、やきものの分類には国際的な統一的な概念はなく、それぞれの国の「やきもの」の歴史を踏まえた分類がされているといって良いでしょう。

（学芸調査室　遠藤啓介）

素地の性質による焼物の分類表

焼物の種類	素地の性質				
	色	透明度	音	硬さ	水の吸い方
土器（有色）	有色	不透明	ボコボコした音	銅線で傷つく	水がもる
炻器（軟）	有色	不透明	ニブイ堅い音	鋭いナイフで傷つき銅線で傷つかず	水がしみる
炻器（硬）	有色	不透明	金属的なサエタ音	鋭いナイフでも傷つかず	水がしみない
土器（白）	白	不透明	ボコボコした音	銅線で傷つく	水がもる
陶器	白	不透明	ニブイ堅い音、稀には金属的な音	鋭いナイフで傷がつき、銅線では傷がつかないのが多いが、鋭いナイフで傷がつかないものも稀にはある	水がしみる
磁器	白	半透明	金属的なサエタ音	鋭いナイフでも傷つかず	水がしみない

内藤匡『古陶磁の科学』雄山閣1969, p43より

編集　　発行：令和4年7月20日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM
〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575　FAX 0942-75-7834
URL http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/